

図書館経営の比較

——館長の司書資格の有無から見た——

信 田 昭 二

1. はじめに

公立図書館の貸出しをはじめとする住民サービスについて、これまでから個々の図書館が人口規模やサービス水準の似通った図書館との比較を行ったり、あるいは一つの府県単位、全国規模などさまざまな形での調査や白書づくりが行われている。その中には、貸出しなど図書館サービスに関する各種指標の分析や評価だけでなく、館長の司書有資格者数や在任期間の問題に触れた文献は多いが、館長の司書資格の有無が及ぼす図書館サービスの¹⁾の違いに言及したものは少ない。

公立図書館は、すべての住民の日常の暮らしのなかで生じるさまざまな資料・情報要求にこたえる責任を負っており、住民と資料を結ぶ職員の働きが重要である。その職員集団のリーダーである館長は、単なる図書館施設の管理者ではなく、住民への図書館サービスの責任者として、司書の経験を積んだ識見豊かな専門職でなければならないといわれて久しいが、依然、その比率は少ない。日本図書館協会刊行の『日本の図書館』に館長の司書資格の有無がはじめて表示された75年版から87年版までによって、市区立図書館の専門職館長を調べると、表1にみるとおり、新しく設置された図書館では75年に30%ほどであった専門職館長の図書館が、85年には40%を越え、87年には60%近くにまでふえてはいる。しかし、全体としては、75年に22.1%だったのが80年に27%に達した後、85年、87年と図書館の数はふえているものの、市区立図書館における専門職館長の比率はほとんど変わっていない。

表1 市区立図書館の専門職館長

年 度	新 設 館		全 体	
	総 数	専門職 (%)	総 数	専門職 (%)
75	16	5 (31.3)	662	144 (22.1)
80	35	12 (34.3)	880	238 (27.0)
85	49	22 (44.9)	1,115	311 (27.9)
87	31	18 (58.1)	1,178	329 (27.9)

(注) 1) 『日本の図書館』各年版による。

公立図書館の館長は専門職でなくてもよいのか、図書館サービスに影響はないのだろうか。調査のある時点で館長が司書有資格かどうかだけでなく、比較的長期間配置されている図書館と全く配置されたことのない図書館との比較を通じて、図書館サービスの違いを考察したいというのが小稿の目的である。

2. 専門職館長の配置状況

市区立図書館のうち、87年現在、司書有資格者の館長の数表1のとおりであるが、5年あるいはそれ以上の長期間、常に館長に司書有資格者を充てているところはいくらぐらいあるのだろうか。日本図書館協会図書館員の問題調査研究委員会が77年に行った調査によると、館長及び司書業務の役職者には司書有資格者を充てることが条例・規則等で定められていると回答したところが19市区（4.1%）12町村（4.5%）、慣例によると答えたところが57市（12.4%）14町村（5.2%）あるという²⁾。

87年現在、5年以上にわたって専門職館長を配置している図書館を、『日本の図書館』の75年版から87年版までに当たって調べてみると次のとおりである。なお、これは同じ人が何年続いたかではなく、人は代わっても司書有資格者が引き続き配置されていたかどうかを調べたものである。

- (1) 74年度までに設立された665館のうち、75年から87年までの間、一貫して専門職館長が配置されている図書館は、20市の本館または中央館（以下「本館」という）と3市区の地域館36館、計31館（4.7%）である⁴⁾。
- (2) 75年度から83年度までの間に新設された333館のうち、最初から87年まで引き続き専門職館長が配置されている図書館は、19市の本館と19市区の地域館36館、合わせて55館（16.5%）である⁵⁾。
- (3) 上記のほかに、最近5年以上、いいかえると83以前から87年までの間専門職館長が続いているところは、57市の本館と16市区の地域館25館、計82館（24.9%）である⁶⁾。

これらを総合すると、87年に専門職館長が配置されている329館のうち、5年以上続いている図書館は96市の本館と25市区の地域館72館、合計168館（51.5%）であり、市区立図書館総数（1,178館）の14.3%に過ぎない。館長の専門職比率27%ほどのうちの約半数が不安定ということになる。もちろん残り161館のうちには、84年以後に専門職館長の配置を条例等で定めたり、慣例化しているところがあると思われるので即断はできないが、その多くは、たまたま調査の時点で専門職館長であったということであろうか。ついでにいうと、先に触れた図書館員の問題調査研究委員会の調査で、「条例・規則等による」と答えた19市のうち、ここでは6市しか確認できなかった。

5年以上専門職館長を配置している96市は、東北から近畿までの33都府県にわたっている。館数の多いのは、大阪（10市）、東京（9市）、愛知（8市）、千葉（6市）の順であ

図書館経営の比較

表2 長期間専門職館長配置の市

人口	市数	専門職 (%)
I 4万以下	125	6 (4.8)
II 4万以上	127	24 (18.9)
III 6万以上	135	29 (21.5)
IV 10万以上	98	18 (18.4)
V 20万以上	37	8 (21.6)
VI 30万以上	45	11 (24.4)
計	567	96 (16.9)

(注) 1) 市数は、『日本の図書館』1987年版による。

り、図書館設置市に対する比率が高いところは、滋賀(42.9%)を筆頭に福島(40%)、栃木(36.4%)、東京(市部34.6%)、大阪(34.6%)などである。87年版の人口段階別によると、表2のとおりである。「人口4万以下」のところで比率が4.8%と際立って低くなっているが、その他の段階ではいずれも20%前後の比率になっており、人口規模による差はほとんどない。なお、政令指定都市と特別区の本館

には該当するところがあったので、表から除いている。

表3 専門職館長の図書館と全国の比較

人口段階		人口一人あたり			人口千人あたり 購入冊数	職員一人あたり 奉仕人口
		蔵書冊数	貸出冊数	資料費		
4万以下	全国	1.45 冊	1.58 冊	149 円	80 冊	10,142 人
	専門職	1.34	1.6	170	90	8,280
4万以上	全国	1.38	2.12	178	102	9,136
	専門職	1.72	3.13	241	135	7,265
6万以上	全国	1.43	2.63	214	131	9,585
	専門職	1.69	3.39	226	136	7,851
10万以上	全国	1.31	2.63	166	116	9,631
	専門職	1.59	2.8	181	108	7,604
20万以上	全国	0.96	2.19	121	82	13,532
	専門職	0.9	2.41	137	73	7,592
30万以上	全国	0.91	2.55	139	104	12,017
	専門職	1.11	3.19	182	137	10,011
計	全国	1.17	2.42	159	106	10,699
	専門職	1.32	3.0	188	121	9,111

(注) 『日本の図書館』1987年版による。

87年版の人口段階別集計に示してある数値と、先の96市の図書館の状況を比べたのが表3である。全国平均の数値には96市を含むが、それぞれの項目ごとに示されている人口数で計算してある。表3をみると、一部の人口段階で蔵書冊数と購入冊数に全国平均の方が高いところがあるが、全体としては専門職館長の館の方が高くなっている。両者の平均の差をみたところ、貸出冊数 $[t=2.9537 > t_{0.05}(2.571)]$ 、資料費 $[t=3.4131 > t_{0.02}(3.365)]$ および職員一人あたり人口 $[t=3.8138 > t_{0.02}(3.365)]$ の三つの指標で有意の差が認めら

図書館経営の比較

れた。

次に、75年から87年までの間、専門職館長と全く縁のなかった図書館を調べると、

- (1) 館長が専任・非専門職だけのところが159館
- (2) 兼務・非専門職館長だけのところが107館
- (3) 専任と兼任の非専門職館長が混在したところが127館

あり、合わせて393館(33.4%)の図書館には、少なくとも5年以上あるいは75年以来、全く専門職館長が配置されたことがない。

3. 比較対象図書館の概況

(1) 対象館の選定

本館の館長に長期間、司書有資格者が配置されている図書館(以下「P館」という)と、全く配置されたことのない図書館(以下「NP館」という)とを比較するにあたり、表2の人口段階別でP館の数が多いII, IIIおよびIVの3段階で調べたところ、それぞれ36市・45市・26市のNP館があった。そこで、P, NPともに数が多く、構成比率の高いIIIの「6万以上」のところを取りあげることにする。なお、実際数は、87年版で図書館経常費が不明など、比較するデータに不備や疑問のある市を除いた後のP館の26市、NP館40市である(詳細は別表1, 2を参照)。

まず、P, NP両グループの図書館施設の状況を、図書館の数と移動図書館(BM)の有無で類別すると、次のようになる。

	P 館	N P 館
A. 複数館のある市……………	4市(12館1台)[15.4%]	3市(15館0台)[7.5%]
B. 単館とBMのある市………	13市(13館13台)[50%]	20市(20館20台)[50%]
B. 単館だけの市……………	9市(9館)[34.6%]	17市(17館)[42.5%]
計	26市(34館14台)	40市(52館20台)
1市平均	1.3館0.5台	1.3館0.5台

Bの市はどちらも半数ずつであるが、Aの市の比率はP館の方が2倍強高くなっており、ほぼそれに見合うパーセントだけP館のCの比率が低くなっている。ちなみに、「人口6万以上」の135市全体の構成をみると、A:17市(12.6%)、B:66市(48.9%)、C:52市(38.5%)となっている。全体とくらべても、NP館のCの比率が少し高い分だけ、図書館の施設整備がおこなわれている市が多く含まれていることになる。1市平均の館数(台数)は、偶然同数になっている。

施設面が類似していて、館長が専門職かどうかだけが違うだけの両グループの図書館サービスを支えている経費と職員の問題をまず概観することにする。なお、以下に引用する数値は、特に説明のない限り、『日本の図書館』87年版からの数値である。

図書館経営の比較

(2) 図書館経常費

図書館費は、職員の人件費、図書などの資料購入費、施設の維持管理費など、図書館活動のための経費である。新館の準備や建設などのための経費、いわゆる臨時的経費を除いた決算額である。表4で、人口一人あたりの図書館費の平均をみると、P館は1,108円でNP館(689円)の61%も多い。両グループとも、1位と2位の間に1,000円あまりの差があるために、平均を引き上げているきらいはあるが、それぞれの1位の数値を除いても、平均はP:1,024円、NP:636円となり、その格差はほとんど変わらない。大阪府と兵庫県下の市立図書館について同様の比較をされた森耕一⁷⁾氏の分析でも、格差は大きい。参考までに人口10万のところで調べてみたが、P館(14市)は1,109円で、NP館(26市)687円の61%⁸⁾増しとなっており、やはり同じような格差であった。

表4 経費・職員

区 分	図書館費		資料費		職員一人あたり人口		専門職比率	
	P	NP	P	NP	P	NP	P	NP
最大値	3,237 ^円	2,783 ^円	1,164 ^円	646 ^円	3,368 ^人	3,837 ^人	100.0%	83.3%
最小値	322	193	67	34	15,600	23,250	33.3	0.
中央値	931 916	586 571	214 203	122 119	8,714 9,111	12,800 13,200	57.1 55.6	40.0
平均値	1,108	689	217	148	9,172	13,382	65.1	42.3
標準偏差	±606	±454	±204	±118	±3,184	±4,508	18.6	18.0
平均の差の検定	$t = 3.156 > t_{0.005} (2.66)$		$t = 1.717 > t_{0.05} (1.671)$		$t = -4.075 < t_{0.005} (-2.66)$		$t = 4.886 > t_{0.005} (2.66)$	

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。
2) t 検定の自由度は、いずれも $df = 64$

また、グループごとに最大値と最小値を比較すると、P館の約10倍に対してNP館は14倍と大きい。P館では、500円以下の市が最小値の1市だけであるのに対して、NP館では12市(30%)もある。

住民が図書館に魅力を認めるかどうかの決め手となる要件の第一が資料である。その資料すなわち図書・新聞・雑誌のほかビデオやレコードなどを購入するための経費が資料費であり、図書館費の中心をなすものである。表4の資料費をみると、P館の平均が200円を越えており、NP館より50%も上回っている。これは最大値の1,164円(浦安)が群を抜いて高いためであり、2位(339円)以下の25市の平均では179円になる。P館には2市しかない100円未満のところNP館では17市(42.5%)もあり、そのうちの4市が50円未満というありさまである。かつて『市民の図書館』に、わが国図書館活動停滞の根源と指摘された資料費の貧しい状況は、一部の先進的な図書館を除いて、20年近くたった今日もほとんど変わっていないようである。

(3) 職員の状況

図書館サービスの直接の担い手である職員の数とを別表で専任だけをみると、P館が総数253で1市平均9.7人、NP館は総数254人で平均6.4人となり、その差は3.3人と大きく、1%の水準 [$t=3.202 > t_{0.01}(2.660)$] で有意差がある。これに、P館5人(内専門職2人)、NP館23人(内専門職3人)の兼務職員を一人0.5の割合で加えても、平均値はP:0.1人、NP:0.2人ふえるだけである。

職員数の基準としては、「公立図書館の望ましい基準(案)」(以下「望ましい基準(案)」)というが人口7,500人に一人以上の専門職員と、その半数程度の非専門職員という数値を示している。トータルでは、人口5,000人に一人の職員ということになる。もちろん、これは図書館業務に専任の職員数のことであるが、先の兼務職員を含めて職員一人あたりの人口数を出したのが表5である。職員一人あたり人口5,000人以下のところは、P館3市、NP館1市だけであるが、これを含めて1万人以下のところが、P館で17市(65.4%)あるのに対してNP館では8市(20%)しかない。望ましい基準(案)の人口5,000人に一人の職員という基準への到達度を平均値で見ると、P:63.1%、NP:41%となり、ここでも、NP館の方が約50%低くなっている。

表5 職員一人あたりサービス人口

区分		5千人以下	5千人以上	1万人以上	1万5千人以上	2万人以上	計
P	市数	3	14	8	1		26
	%	11.5	53.9	30.8	3.8		100
NP	市数	1	7	20	8	4	40
	%	2.5	17.5	50.0	20.0	10.0	100

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。

2) $\chi^2=15.655 > \chi^2_{0.005}(14.86)$ $df=4$

専門職員(司書・司書補)の数は、上述のとおり、望ましい基準(案)が人口7,500人に一人の専門職員という基準を示しており、職員総数に占める専門職員の比率は66.7%になる。両グループでこの基準を越える専門職員を配置しているところは、別表によると、P館4市とNP館1市だけであり、職員数を無視して専門職比率だけをみても、P館12市(46.2%)とNP館6市(15%)しかない。表4と6によれば、P館では全員が専門職員のところの2市を含めて20市が50%以上であり、最低でも33.3%なので、平均が65.6%と望ましい基準(案)に近い数値になっている。NP館では、半数を越える23市が50%以下のために平均も42.3%と低くなっている。

図書館経営の比較

表6 専門職比率

区分	25%以下	25%以上	50%以上	75%以上	計
P	市数	6	11	9	26
	%	23.1	42.3	34.6	100
NP	市数	4	19	16	40
	%	10.0	47.5	40.0	100

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。

2) $\chi^2=15.828 > \chi^2_{0.005}(11.34)$ $df=3$

4. 貸出しに関する指標の比較

(1) 貸出密度

住民は、手軽に必要な資料を借りられることから図書館を身近に感じ、予約サービスやレファレンスその他の図書館サービスへの要求をふくらませることができる。個人貸出冊数が多いということは、住民と図書館との結びつきの強さを示す指標の一つでもある。住民一人あたりの貸出冊数（貸出密度）について、望ましい基準（案）は、図書館が「住民の生活に役立つためのサービスの水準」として、人口の2倍の貸出冊数を示している。

表7 貸出密度

区分	P	NP
最大値	9.85 冊	5.59 冊
最小値	1.28	0.38
中央値	2.38 2.34	1.68
平均値	3.29	1.92
標準偏差	±2.12	±1.21
平均の差の検定	$t=3.293 > t_{0.05}(2.66)$	

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。

2) t 検定の自由度 $df=64$

両グループの貸出密度を表7と8によって比べると、P館では、浦安が最高の9.85冊で2位（6.85冊）以下を引き離しているが、17市（65.4%）が2冊を越えており、2冊以下のところは9市（34.6%）だけで、平均でも3.29冊になっている。これに対して、NP館では5.59冊を最高に、2冊を越えているのは16市（40%）だけであり、0.5冊

以下の2市を含めた24市（60%）までが2冊以下となっている。したがって、平均も表3の全国平均を下回る1.92冊となっており、P館との差は73.8%とこれまでみてきたどの指標よりも大きく、平均の差は1%の水準で、また、分布については10%の水準で、ともに有意の差が認められた。

図書館経営の比較

表8 貸出密度の分布

区 分		1冊 以下	1冊 以上	2冊 以上	3冊 以上	4冊 以上	5冊 以上	6冊 以上	7冊 以上	8冊 以上	9冊 以上	計
P	市 数		9	6	3	4	1	2			1	26
	%		34.6	23.1	11.5	15.4	3.8	7.7			3.8	100
NP	市 数	10	14	9	3	3	1					40
	%	25.0	35.0	22.5	7.5	7.5	2.5					100

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。

2) $\chi^2 = 12.419 > \chi^2_{0.05} (12.02) \quad df = 7$

貸出冊数には、他の要素との間に次のような関係がある。

- (1) 貸出冊数 = 蔵書冊数 × 蔵書回転率
- (2) 貸出冊数 = 年間購入冊数 × 購入図書回転率
- (3) 貸出密度 = 実質貸出密度* × 登録率 ÷ 100

*「実質貸出密度」は、登録者の一人あたりの年間貸出冊数。

貸出冊数を伸ばすためには、住民の身近に図書館があること、豊富な資料費に裏付けられた資料と手軽に借りられる貸出方法、資料のことによく通じている専門職員などを欠かせないが、さらに上の式から、それぞれの要素が貸出冊数の伸びに密接なかかわりのあることがわかる。貸出密度とこれらの要素との相関係数は、表9のとおりである。

表9 貸出密度との相関係数

指 標	P	NP
資 料 費	0.8105	0.7093
購 入 冊 数	0.8304	0.6345
蔵 書 冊 数	0.6089	0.7788
登 録 率	0.6927	0.772
職員一人あたり人口	-0.6497	-0.6281
専門職比率	0.2838	0.2663

(注) 『日本の図書館』1987年版による。

(2) 資料費と貸出し

表9の相関係数が示すように、資料費は貸出冊数と強い正比例の関係にある。両グループの貸出密度と人口一人あたりの資料費との関係を表10でみると、100円以下の資料費で貸出密度が2冊を越えているのは、NP館の1市(No.16)だけであるが、この市は、後述の購入図書回転率も65.5回と購入冊数が少ない(31冊)割に高いので、何かの事情で蔵書構成が新鮮なのではないかと推測される。また、100円以上で4冊以上はNP館の2市(No.2, 4)だけで、5冊以上のところはない。86年版によるとNo.2の市は、その年の資料費の6倍近い臨時資料費がついており、その影響が現れているものと思われる。後、「7冊以上」

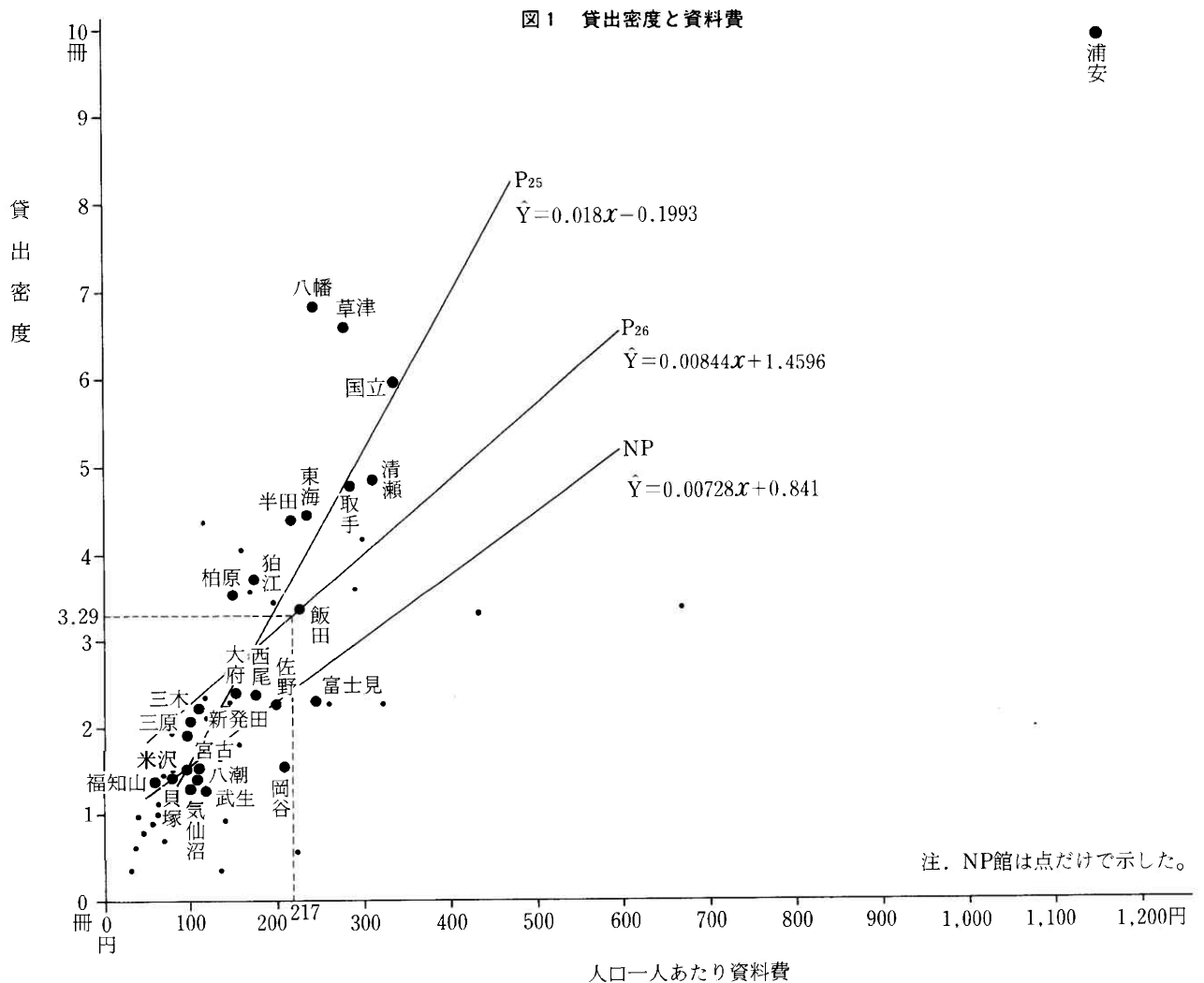
図書館経営の比較

で区切っているが、1,164円の浦安が貸出密度9.85冊で1位である。表10の分布には、 χ^2 検定で5%の水準で有意差がある。

表10 資料費と貸出密度

貸出密度	100円以下	100円以上	200円以上	300円以上	400円以上	500円以上	600円以上	700円以上	計
7冊以上								1	1
6冊以上			2						2
5冊以上				1					1
4冊以上		2	3	1	1			1	4
3冊以上		2	1	1		1			3
2冊以上	1	4	6	2	1				6
1冊以上	3	10	5	3	1				9
1冊以下		6	3	1					6
計	3	17	11	9	2	2	1	1	26
			15	4					40

- (注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。
 2) 太字はPの市数。
 3) 資料費の検定 $\chi^2=12.952 > \chi^2_{0.05} (12.59) \quad df=6$



図書館経営の比較

相関係数が高いので、一次回帰分析によって回帰直線を求めると、図1のようになる。例えば、図1のP₂₆とNPの式のXに150円を置いて計算すると、P館では3.11冊の貸出密度が期待できるのに、NP館では1.93冊しか見込めない。その間に1.2冊の開きが生じる。なお、P₂₅の回帰直線は、試みにP館の1位(浦安)を除く25市の数値から求めたものであるが、相関はさらに強くなっている。

また、専門職比率と資料費、貸出密度との重相関係数を求めると、P: $r = 0.8234$, NP: $r = 0.7067$ である。P館は資料費と貸出密度との単相関よりも少し高くなっているが、NP館では逆に下がっている。

(3) 蔵書と蔵書回転率

図書館では、年々新しい資料を購入または寄贈などによって受け入れる一方で、不要となって資料を除籍しており、この受入冊数と除籍冊数の差(年間増加冊数)が蓄積されて蔵書を形成していく。したがって、この蓄積の期間が永いほど、すなわち創立年が古い図書館ほど蔵書冊数は多くなる。そして、蔵書と貸出冊数が正比例の関係にあることを、表9の相関係数が示している。『図書館年間1987』でP館とNP館の創立年代を、日野市立図書館の画期的な実践が始められた65年を区切りにし、その後をほぼ10年刻みでみると、次のようになっている。

	64年度以前	65～74年度	75～83年度
P 館	15市 (57.7%)	4市 (15.4%)	7市 (26.9%)
NP 館	25市 (62.5%)	7市 (17.5%)	8市 (20%)

表11 蔵書

区 分	蔵 書 冊 数		蔵 書 回 転 率	
	P	NP	P	NP
最大値	3.7 冊	3.3 冊	5.4 回転	3.0 回転
最小値	0.7	0.5	0.7	0.5
中央値	1.6	1.0	$\frac{1.8}{1.7}$	1.7
平均値	1.7	1.2	2.0	1.7
標準偏差	±0.8	±0.6	±1.1	±0.7
平均の差の検定	$t = 3.24 > t_{0.005} (2.66)$		$t = 1.722 > t_{0.05} (1.671)$	

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。
 2) t 検定の自由度は、いずれも $df = 64$

どちらもほぼ同じような構成であるが、P館の方が75年度以降にできた図書館が多くなっている。表11の蔵書冊数では、両グループとも平均が1冊を越えているものの、比較的新しい図書館の多いP館の方が少し高い。これは、浦安などP館の新しい図書館の購入冊数の多さが、蓄積期間の長短以上に蔵書をふやしているものと考えられる。別表でみると、

図書館経営の比較

蔵書冊数が2冊以上のところはP館に5市、NP館には3市あった。また、1冊未満のところは、P館には3市だけであるが、NP館には18市もある。

蔵書回転率は、1年間に蔵書が平均何回利用されたかを表す指標であり、それによって蔵書が住民のニーズに適合しているかどうかを測るものさしである。一般に、蔵書冊数がふえると、その中にあまり利用されない蔵書が含まれるようになるために、蔵書回転率は低くなる傾向にあるが、表11の蔵書回転率を見ると蔵書の多いP館の方が僅かであるが高くなっている。糸賀雅児氏の分析によると、蔵書中の児童書率が蔵書回転率に高い相関があるということであるが、ここでもP館 ($r=0.4011$)、NP館 ($r=0.4168$) と糸賀氏の示す係数 ($r=0.403$) に近い数値が出ている。⁹⁾ なお、蔵書中の児童書率はP:28.2%に対してNP:29.3%で、NP館の方が少し高くなっている。いずれにしても、蔵書回転率が示す利用者の要求にマッチした蔵書構成という点からみれば、P館の方が優れているといえよう。この平均の差のt検定でも、10%の水準で有意差が認められた。

表12 蔵書回転率の分布

回転率 蔵書	1回転 以下	1回転 以上	2回転 以上	3回転 以上	4回転 以上	5回転 以上	計
3冊以上		2	1				3
2冊以上		1	2				3
1冊以上	3	7	3	2	1	1	17
1冊以下	3	2		1			3
計	3	12	6	3	1	1	26
	8	20	10	2			40

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。

2) 太字はPの市数

3) $\chi^2=4.715 < \chi^2_{0.1} (9.24)$ $df=5$

蔵書冊数と蔵書回転率の関係を示す表12によると、3回転以上しているのは蔵書が2冊未満のところであり、蔵書が2冊以上では、一番多い浦安(37.冊)の2.7回転を最高にP館の3市だけが2回転以上で、NP館の3市はすべて2回転以下になっている。また、NP館では、蔵書が1冊以下と少ない18市の内の11市までが1回転にも達しておらず、蔵書の量だけでなく、質の貧しさをも示しているといえよう。P館15市(57.7%)、NP館28市(70%)と両グループともに半数以上の市が2回転以下というのも、やはり低過ぎるといわなければならない。

なお、蔵書冊数と蔵書回転率との間には、P館 ($r=-0.1641$)、NP館 ($r=0.0407$) とともに相関はみられなかった。

(4) 購入冊数と購入図書回転率

先に触れたように、望ましい基準(案)には人口千人あたり125冊以上の年間増加冊数が必要という基準が示されている。年間増加冊数とは、文字通りに解すれば購入・寄贈等を

図書館経営の比較

含む受入冊数から除籍冊数を引いた残りの冊数のことであるが、除籍を無視した受入冊数の意味で使われたり、購入冊数として扱われたりしている。このことについて、森氏は「特に寄贈は、利用者の要求とかニーズとは無関係に雑多なものが入ってくるので、“基準”としては購入冊数を問題にすべきである¹⁰⁾」という。両グループの受入冊数と購入冊数の差すなわち寄贈冊数のウエイトは、P館9.1%に対してNP館では19.1%と大きい。しかし、購入冊数（45冊）の3倍近い受入冊数（128）冊のあるNP館No.30の市の場合でも貸出密度1冊で、購入図書回転率は22.4回転であり、寄贈図書が貸出しサービスに直接的に貢献している様子は見えない。また、受入冊数と貸出密度との相関係数も、購入冊数の場合に比べてP館は0.8304から0.8368に、NP館は0.6345から0.6164に、それぞれ僅かずつ上下するだけで大差はない。したがって、ここでは、年間増加冊数を年間購入冊数のこととして扱う。

表13 購入図書の指標

区 分	購 入 冊 数		購入図書回転率	
	P	NP	P	NP
最大値	478 冊	358 冊	43.2 ^[注]	97.7 ^[注]
最小値	35	20	10.6	5.1
中央値	121 111	63 61	27.7 27.6	25.1 23.6
平均値	131	86	26.6	27.1
標準偏差	±89	±71	±8.1	16.3
平均の差の検定	$t=2.269 > t_{0.025} (2.00)$		$t=-0.145 < t_{0.05} (-1.671)$	

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。
2) t 検定の自由度は、いずれも $df=64$

表14 人口千人あたり購入冊数の分布

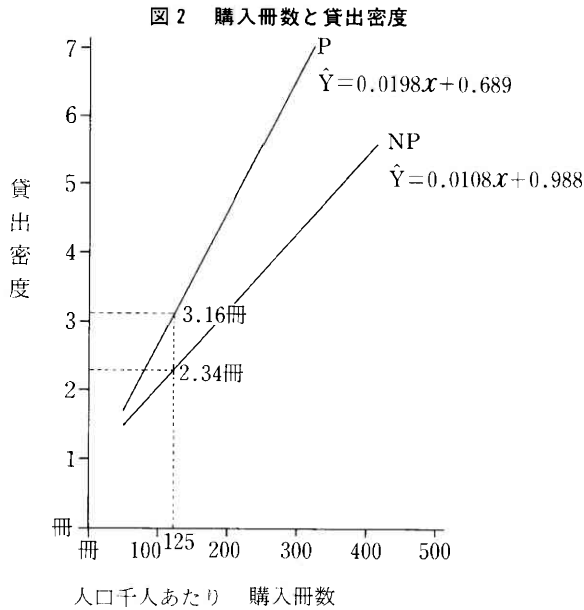
区 分		50冊	50冊	100冊	150冊	200冊	250冊	300冊	計
		以下	以上	以上	以上	以上	以上	以上	
P	市 数	3	9	4	7	2		1	26
	%	11.5	34.7	15.4	26.9	7.7		3.8	100.0
NP	市 数	17	14	5	1	1	1	1	40
	%	42.5	35.0	12.5	2.5	2.5	2.5	2.5	100.0

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。
2) $\chi^2=14.52 > \chi^2_{0.025} (14.45)$ $df=6$

表13と14によって年間購入冊数の状況をみると、P館の12市とNP館の31市が100冊以下であり、P館の平均が125冊の基準を越えているのは、1位の478冊（浦安）が平均を引き上げていることになる。また、両グループの平均の差と分布に、それぞれ5%の水準で有意差が認められた。

資料費が貸出冊数と密接な関係があれば、その資料費で購入した図書も強い関係があるのは当然である。表9をみるとP館（ $r=0.8304$ ）、NP館（ $r=0.6345$ ）ともに高い比例

図書館経営の比較



の関係を示しているの、一次回帰分析によって回帰直線を求めると、図2のようになる。

P、NP両方の式に125冊を代入して計算すると、同じ購入冊数でも貸出密度はP館の3.16冊に対して、NP館は2.34冊しか期待できず、購入冊数がふえるにしたがって、その開きは大きくなり、NP館の効率が悪くなることを示している。

専門職比率と購入冊数、貸出密度との重相関係数を求めると、P： $r =$

0.8528、NP： $r = 0.6614$ である。先の資料費のときは違って、両方とも僅かであるが高くなっている。

購入冊数と貸出冊数との関係を見るのに使われる指標に購入図書回転率がある。年間貸出冊数を年間購入冊数で割って求められる。これは、図書館がその年度に買った図書が平均何回借りられたかを見ることによって、選書や蔵書構成の適否を判断する目安の一つである。館長はじめ職員が選択し、購入した図書がよく利用されたかどうかを示す購入図書回転率が高いということは、利用者の要求にかなった適切な選書が行われていることにもなる。しかし、新しく図書館を開設するときに大量に図書を購入するなどしたときは、その年以後2～3年は、購入冊数が少なくても購入図書回転率が高くなることがあるので注意が必要である。例えばNP館で、購入冊数が極めて少ないにもかかわらず貸出密度の高い次の例がそうである。

市No.	人口	貸出冊数(貸出密度)	購入冊数(人口あたり)	購入図書回転率
2	72千人	292千冊(4.36冊)	2.990冊(45冊)	97.7回

『日本の図書館』86年版によると、この市では、前の年度に経常的な図書費の6倍近い臨時資料費がついており、その影響がここに現れたものと思われる。

望ましい基準(案)は、人口の8分の1の購入冊数で貸出密度2冊としているので、購入図書回転率は16回転になる。表15でみると、P館の21市とNP館の26市が20回転を越えている。森氏が「貸出密度の高い市の購入図書回転率はほぼ24～36の間に収まっている」と指摘するとおりであり、16回転では少な過ぎるといわなければならない¹¹⁾。平均は、P館の26.6回転に対してNP館が27.1回転と少し上回っていてほとんど差はないが、1位の97.7回転を除いて計算すると、NP館の平均は25.3回転となり、P館との間に1%の水準 [$t = 0.4809 > t_{0.005}(2.66)$] で有意差が認められる。

図書館経営の比較

表15 貸出密度と購入図書回転率

貸出密度	10回転以下	10回転以上	20回転以上	30回転以上	40回転以上	50回転以上	60回転以上	計
7冊以上			1					1
6冊以上				1	1			2
5冊以上		1		1				1
4冊以上			3	1		1	1	4
3冊以上	1	2	1	1				3
2冊以上	1	1	2	3	2		1	6
1冊以上		2	4	4	3			9
1冊以下	2	4	3	5	4		1	14
1冊以下	2	4	3	5	4		1	14
計	4	5	11	9	1	1	2	26
	4	10	14	8	1	1	2	40

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。

2) 太字はPの市数

3) $\chi^2 = 6.404 < \chi^2_{0.1} (10.64)$ $df = 6$

(5) 登録率と実質貸出密度

登録率は、個人貸出を利用するために登録した人数のサービス人口に対する比率で、どれだけ多くの住民に利用されているかを示す指標である。望ましい基準(案)は、貸出密度2冊を実現するために必要な登録率の基準として15%をあげている。表16, 17で両グループの状況を見ると、P館では62.8%を最高に、14市(53.8%)がこの基準を越えており、平均でも上回っているのに対して、NP館で15%以上は9市(22.5%)だけであり、23市が10%以下である。登録者は、P館の平均が住民5人に一人であるのに対して、NP館ではさらにその約半分の9人に一人と少ない。

表16 登録者の指標

区 分	登 録 率		実 質 貸 出 密 度	
	P	NP	P	NP
最大値	62.8 %	47.0 %	71.0 冊	43.0 冊
最小値	3.6	3.2	5.0	8.1
中央値	19.4 17.1	8.0 7.9	17.4 16.5	17.5 17.2
平均値	20.4	11.7	20.8	18.8
標準偏差	14.3	9.8	15.0	8.1
平均の差の検定	$t = 2.869 > t_{0.005} (2.66)$		$t = 0.706 < t_{0.1} (1.296)$	

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。

2) t 検定の自由度は、いずれも $df = 64$

表9で登録率をみると、P館($r = 0.6844$)、NP館($r = 0.772$)どちらも高い相関を示しているの、回帰直線を求めると図3のようになるが、登録率の高低による開きはほとんどない。なお、専門職比率と登録率との間には、P館($r = 0.3851$)、NP館($r = 0.2153$)と低い相関がみられるが、糸賀氏の分析($r = 0.161$)より幾分高くなっている。¹²⁾

図書館経営の比較

表17 登録率

区分		10%以下	10%以上	20%以上	30%以上	40%以上	50%以上	60%以上	計
P	市数	9	5	6	4		1	1	26
	%	34.6	19.3	23.1	15.4		3.8	3.8	100.0
NP	市数	23	11	4		2			40
	%	57.5	27.5	10.0		5.0			100.0

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。
 2) $\chi^2 = 19.256 > \chi^2_{0.01} (16.81)$ $df = 6$

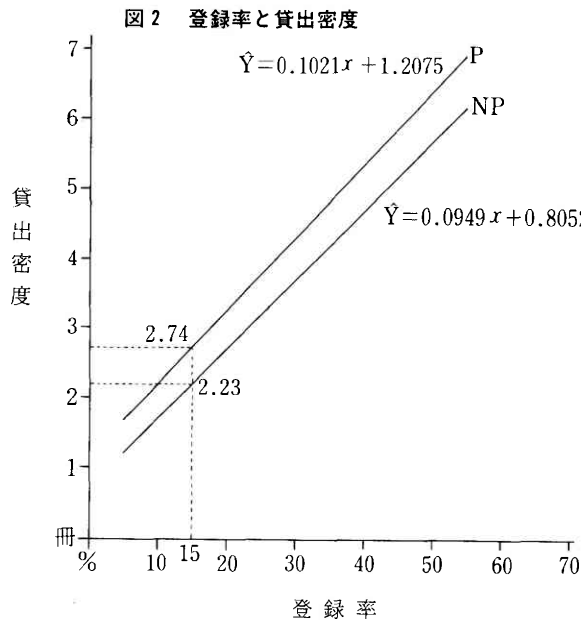


表18 実質貸出密度

区分		10冊以下	10冊以上	20冊以上	30冊以上	40冊以上	50冊以上	計
P	市数	4	13	6	1		2	26
	%	15.4	50.0	23.1	3.8		7.7	100.0
NP	市数	2	24	10	2	2		40
	%	5.0	60.0	25.0	5.0	5.0		100.0

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。
 2) $\chi^2 = 6.597 < \chi^2_{0.1} (9.24)$ $df = 5$

実質貸出密度を表16と18で見ると、P館では17市（65.4%）までが20冊以下であるが、71冊、64冊といった飛び抜けて高い市の影響で平均が20.8冊となっている。NP館も同様に26市（65%）が20冊以下であるが、43冊を筆頭に14市の影響で平均（18.8冊）が上がって、P館と大きな差がなくなっている。

図書館経営の比較

実質貸出密度が一桁と異常に低いP館の4市(15.4%)とNP館の2市(5%)は、いずれも登録率が20%を越えている。最近、登録者数をその年に実際に利用した人数でなく、2～3年分を累積した人数を掲げているところが多くなっているが、恐らく、これらの市も、そのようなことではないかと思われる。そうでなければ、よほど資料が不足していることになるが、それでは4.82冊とか3.6冊とかいった貸出密度を達成することはできないはずである。例に両グループから1市ずつ取り出してみると、次のようになる。

市	人口	登録者数(%)	貸出冊数(／人口)	実質貸出密度
取手	78	39,860人(51.1)	376千冊(4.82冊)	9.4冊
No. 5	87	38,374(44.1)	313(3.6)	8.2

例えば、取手の登録者の10%の4千人が頻繁に貸出しを利用する常連だとして、1回の貸出期限が2週間として1年に20回、1回に3冊ずつ借りたとして1人60冊の4,000人分が240,000冊になるとすると、残り136,000冊を約35,000人の登録者で割ると、年間に一人平均4冊しか利用しないことになる。ここでは児童の登録者が8,550人(21.5%)あるので、常連が10%や20%とは考えられないのである。NP館のNo.5市も同様である。特に目立ったところを例に出したが、ほかにもこのようなところがあるかも知れない。登録率と実質貸出密度については、このような事情があるので厳密な比較はしにくいということになる。

(6) 業務量と職員の関係

職員一人あたりの貸出冊数、いわゆる業務量の平均を表19と20でみると、P館の25,819冊に対してNP館は22,206冊で、その差(3,613冊・16.3%)は少なく、平均、分布ともに有意差はない。職員一人あたりにして、P館の方がたくさん貸出しをしていることは確かであるが、多ければよいというものではない。P館の草津(64,111冊)とか半田(51,375冊)のように業務量が多すぎるところで、臨時職員などの補助要員が確保されておれば別であるが、そうでなければ大変である。業務量が多すぎると貸出し、返却などの貸出業務に負われて、幅広くキメの細かいサービスができなくなるし、この状態が長く続くと、かつての立川のように労働過重から職員に職業病が発生する危険さもある。そうかといって、NP館の5市のように1万冊以下でも効率が悪い。業務量の水準について、森氏は欧米の例をひきながら、「貸出サービス以外の図書館サービスの充実強化にともなって、貸出密度はある高さ(たとえば5冊)に維持しながら、業務量は徐々に15,000冊前後に近づけることが望ましい¹³⁾」という。15,000～20,000冊のところはP館、NP館ともに6市あるが、貸出密度が5冊以上のところはなく、両グループの約半数が2万～4万冊のところにとまっている。当面、15,000冊は無理としても、業務量が30,000冊以下に押さえられるような人員の配置が必要であろう。

図書館経営の比較

表19 業務量

区分	P	NP
最大値	64,111 冊	48,667 冊
最小値	10,333	4,800
中央値	22,333 22,250	21,429 21,167
平均値	25,819	22,206
標準偏差	±12,086	±10,253
平均の差の検定	$t=1.283 < t_{0.1} (1.296)$	

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。
2) t 検定の自由度 $df=64$

表20 業務量

		1万冊以下	1万冊以上	2万冊以上	3万冊以上	4万冊以上	5万冊以上	6万冊以上	計
P	市数		10	9	4	1	1	1	26
	%		38.6	34.6	15.4	3.8	3.8	3.8	100.0
NP	市数	5	11	14	8	2			40
	%	12.5	27.5	35.0	20.0	5.0			100.0

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。
2) $\chi^2=7.153 < \chi^2_{0.1} (10.64)$ $df=6$

職員一人あたりの人口数と貸出密度との間には、P： $r=-0.6497$ 、NP： $r=-0.6281$ と高い負の相関があるので、この人口数を望ましい基準(案)の5,000人との比に置き換えた数値で調べると、P： $r=0.7197$ 、NP： $r=0.6924$ の係数が得られた。職員数では、かなり高い正比例の関係があることになる。

貸出密度と職員の専門職比率との間には、表21のとおり、P館($r=0.2838$ 、兼務を含むと $r=0.2955$)とNP館($r=0.2663$ 、同 $r=0.324$)ともに低い相関がみられる。専門職比率別では、P館の場合に一番強い相関があるのはIIの50~75%のときで、75%を越えると無相関になるし、25~50%では強い反比例の関係になる。専門職比率が75%以上のところでは、実人数はともかくとして、比率ではすでに専門職員が十分に配置されているということになり、そこで多少比率が上下しても貸出密度に影響が出ないというのは考えられる。しかし、Iのところ、貸出密度と専門職比率が反比例することを示しているのはなぜであろうか。職員集団のなかで専門職員が半数以下になると、その専門性が十分に発揮できないというよりもマイナスに作用するということであろうか。人口6万人段階の小都市の図書館だけのことなのかどうか、調べてみたい課題である。また、NP館ではIだけに最も相関が強く現れている。ここは4市と数が少ないために、この相関係数($r=0.7671$)の信頼度には些か疑問があるが、非専門職員の多い中での数少ない専門職員の影響力の現れと見たい。ほかのII、IIIでは相関はなかった。

図書館経営の比較

なお、業務量と職員の専門職比率の関係では、P館 ($r=0.3921$)、NP館 ($r=0.1953$) となっており、P館の方にだけ弱い相関が見られた。職員数と専門職比率、業務量の重相関係数を求めると、P: $r=0.3922$ 、NP: $r=0.0382$ になった。P館では、業務量に職員数と専門職比率が低い相関をもっていることになる。専門職比率別に業務量をみると、表21に示すとおり、P館では専門職比率が高いほど業務量も多くなっているが、IIのところNP館のI、IIよりも少なくなっている。

表21 専門職比率との関係

区 分		P		NP	
		相関係数	実 績	相関係数	実 績
1. 貸出密度		0.2955	3.29 冊	0.324	1.92 冊
比 率 別	I. 0%~			0.7671	1.61
	II. 25%~	-0.6836	2.03	0.0374	1.64
	III. 50%~	0.4948	3.83	0.0421	2.18
	IV. 75%~	-0.0206	3.49		
2. 業務量		0.3921	25,819	0.2251	22,206
比 率 別	I. 0%~			0.9341	19,815
	II. 25%~	-0.4415	19,269	0.2036	22,064
	III. 50%~	0.339	24,718	0.0753	21,320
	IV. 75%~	-0.1956	31,531		

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。

(7) 貸出コストとサービス指数

貸出コストは、図書館経常費を貸出冊数で除して得られる貸出冊数1冊あたりの経費である。図書館経常費が貸出しサービスだけに使われるのではないし、図書館サービスが貸出しだけではないのはもちろんであるが、資料提供を基本におく図書館サービスの中核である貸出しの成果と図書館経常費の関係から、図書館経営の評価に役立てようとするものである。貸出コストと貸出密度の間には、P館 ($r=-0.5572$)、NP館 ($r=-0.4467$) ともかなりの反比例の関係がみられる。貸出密度が高くなれば貸出コストが低くなるということであるが、貸出密度がそんなに高くもないのに貸出コストが低すぎる場合は、不十分な貸出し以外の図書館サービスに取り組んでいないのではないかという懸念が生ずる。

両グループの貸出コストを表22、23でみると、P館15市 (57.8%)、NP館20市 (50%) ともに200円~400円のところに収まっている。平均も、P館の377円に対してNP館は431円と高いが、貸出コストが1,477円と1,003円の異常に高い2市を除くと389円になり、P館との差はほとんどなくなる。貸出密度の高い図書館の実績ということで、別表から貸出密度3冊以上のP館11市、NP館7市を取り出して貸出コストをみると、P館の平均285円に対してNP館では323円と12%ほど割高になっている。これらの実績から、貸出コストは300円

図書館経営の比較

前後、少し幅をもたせた200円～400円が妥当なところかも知れない。貸出コストの平均と分布については、両グループの間に有意差は認められなかった。

表22

区 分	貸 出 コ ス ト		貸出サービス指数	
	P	NP	P	NP
最 大 値	622 円	1,477 円	837	1,028
最 小 値	176	133	184	107
中 央 値	370	365 351	382 368	442 412
平 均 値	378	431	443	416
標準偏差	±120	±256	±150	±201
平均の差の検定	$t = -0.986 > t_{0.1}(-1.296)$		$t = -0.497 < t_{0.05}(-2.66)$	

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。

2) t 検定の自由度は、いずれも $df = 64$

表23 貸出コスト

		100円 以上	200円 以上	300円 以上	400円 以上	500円 以上	600円 以上	700円 以上	800円 以上	900円 以上	1,000円 以上	計
P	市 数	1	8	7	5	4	1					26
	%	3.8	30.8	26.9	19.3	15.4	3.8					100.0
NP	市 数	3	11	9	7	4	2	1		1	2	40
	%	7.5	27.5	22.5	17.5	10.0	5.0	2.5		2.5	5.0	100.0

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。

2) $\chi^2 = 3.5818 < \chi^2_{0.1}(13.36)$ $df = 8$

貸出コストが貸出し1冊あたりの経費からその効率を測るのに対して、投入した経費総額とそれによって住民に提供された便益の差、あるいは比率から貸出サービスを評価しようとする指標に、次の三つがある。

- (1) 効 率 = 購入図書平均単価 × 貸出冊数 - 図書館総経費¹⁴⁾
- (2) 貸出サービス指数 = 購入図書平均単価 × 貸出冊数 ÷ 図書館総経費 × 100¹⁵⁾
- (3) 貸 出 便 益 = 購入図書平均単価 - 図書館総経費 ÷ 貸出冊数¹⁶⁾

(1)の「効果」は『市民の図書館』に示されている考え方であるが、糸賀氏の分析によって「貸出冊数の絶対量との相関がきわめて強く ($r = 0.91$)、図書館の比較、評価には不適當である」と指摘されている。その代わりとして同氏が導入した(3)の貸出便益は、「効果」を貸出冊数で除して求めるが、糸賀氏自身、「貸出便益の変動を説明する内的要因は不安定で説明しにくい」こと、「購入図書平均単価との相関がきわめて強い ($r = 0.78$) ということもあり、現時点ではこの指標による比較、評価は一考を要する」という。(2)の貸出サービス指数は、住民が図書館で得た便益とそのため住民が負担した図書館総経費との比率である。これは、72年に石塚栄二氏が図書館雑誌 (64-4) に掲載されたグラフにヒントを

図書館経営の比較

得て、発表された指標である。¹⁹⁾ 参考までに購入図書¹⁹⁾の平均単価を調べると、P館1,462円、NP館1,476円であり、貸出サービス指数との間にはP館に弱い相関 ($r=0.3795$) がみられたが、NP館 ($r=0.1094$) は無相関である。

貸出サービス指数は、提供した便益と投入した費用の比を指数化したものであるから、100では収支差し引きゼロであり、200で投入費用の2倍の効果があつたことになる。しかし、森氏が指摘するように、住民の「貸出による利用は、自ら購入して所有することとは等価ではなく、後者の半分ぐらいの値打ちと考えた方がよいから、200以上になるようでない」と、図書館の存在意義を疑われてもしかたがない。²⁰⁾ ということは、「住民の生活に役立つためのサービスの水準」として、300以上が必要になる。表22と24をみると、両グループともに平均は400を越えて高いようであるが、300以上はP館21市 (80.8%) に対してNP館は26市 (65%) しかない。NP館では、1位 (1,028) の市が全体の平均を引き上げていることになる。専門職比率とこの指数との間には、P館 ($r=0.334$) だけに低い相関がみられたが、NP館 ($r=0.1023$) にはなかった。

貸出サービス指数と貸出コストとの間では、P館 ($r=-0.6912$)、NP館 ($r=-0.7318$) の双方に負の強い相関が認められた。したがって、貸出コストの低いところほど指数が高くなる傾向になる。P・NP両グループの貸出サービス指数の分布は、表24のとおりである。図書館があるというメリットが少ない200以下のところが、P館1市 (指数184) とNP館に3市 (指数107, 138, 188) もあるが、P館の21市 (80.8%) とNP館の26市 (65%) は300以上であり、両グループの平均、分布にはともに有意差は認められない。

表24 貸出サービス指数

		100以上	200以上	300以上	400以上	500以上	600以上	700以上	800以上	900以上	1,000以上	計
P	市数	1	4	11	4	3	2		1			26
	%	3.8	15.4	42.4	15.4	11.5	7.7		3.8			100.0
NP	市数	3	11	4	10	5	1	4	1		1	40
	%	7.5	27.5	10.0	25.0	12.5	2.5	10.0	2.5		2.5	100.0

(注) 1) 『日本の図書館』1987年版による。

2) $\chi^2=13.579 > \chi^2_{0.1} (13.36)$ $df=8$

5. むすび

これまで見てきたように、長期間館長に司書有資格者を配置してきた26市の図書館と全く配置されたことのない40市の図書館の間には、まず第一に投入に関する指標に大きな差があることがわかった。図書館サービスを支える図書館費・資料費、職員数・専門職比率 (以上表4)、それに蔵書冊数 (表11) や購入図書冊数 (表13) の平均すべてに、P館とNP館の間に有意差が認められた。このことは、住民の付託を受けて図書館を設置し管理する

図書館経営の比較

自治体の、館長に専門職を継続的に配置することに象徴的に表れている図書館行政への理解度を示すものといえよう。もちろん、自治体当局に初めから図書館活動への深い理解があったわけではない。住民への図書館サービスに懸ける図書館職員の取り組みと、それを支持し協力する住民の働きが議会を含む自治体全体を動かしてきた成果とみるべきであろう。

産出に関する指数も、投入指数の優位を反映してP館の指数の方が高くなっており、貸出密度(表7)をはじめ、登録率(表16)、蔵書回転率(表11)、購入図書回転率(表13)の平均には有意の差が見られた。だが、実質貸出密度(表16)のほか、業務量(表19)、貸出コストおよび貸出サービス指標(以上表23)の平均には、残念ながら有意差が認められるほどの開きはなかった。

専門職比率と産出の指標との関係では、P館の方に貸出密度(表21)、登録率(4(5))、業務量(表21)、貸出サービス指数(4(7))で、NP館より高い相関が見られた。ということは、P館の方が専門職員の専門性が発揮しやすい職場環境を示しているといえる。また、専門職比率の段階別では、P館が比率が高いほど業務量が多くなっていたし(表21)、職員数・専門職比率と貸出密度との重相関係数でP館だけに相関がみられる(4(7))など、専門職員の働きにも明らかな違いのあることが指摘できる。

1%の水準で有意差のあった貸出密度は、表9に掲げた要素のほか、図書館施設の数や位置、開館時間、貸出方法などさまざまな要素が影響しあった総合的な結果であり、ここで取り上げた指標だけで即断はできないが、全体としては、専門職館長が配置されている図書館の方が貸出しサービスの効果が上がっているということができよう。

住民の身近にあって、日常の生活のなかで生じるさまざまな資料・情報の要求にこたえなければならない公立図書館の活動は、究極のところ、館長をはじめとする職員集団の力量にかかっている。問題は、住民の要求にこたえるような振りをして図書館はつくるけれど、専門職館長や司書を配置せず、予算もろくに与えないでお茶をにごしている自治体を変えて、専門職館長が継続的に配置される図書館をふやすことである。議会を動かし、行政を変えるには、まず、住民の支持と協力がなければならない。そのためには、長期間専門職館長が配置されている14.3%の図書館が核になり、87年現在、専門職館長が配置されている残りの161館を巻き込みながら、個々の図書館での住民の要求にこたえる地道な図書館サービスの展開こそがなによりも大切ではなからうか。

図書館経営の比較

〔注〕

- 1) 図書館調査あるいは白書には、全国的な統計としての『日本の図書館』、『図書館年鑑』のほか、大阪（1983）、兵庫（1978）など府県単位の白書から、日野（1978）、藤沢（1981）、名古屋（1985）など1市だけのものまで多数ある。最近のものとしては、次の文献が全国の図書館から人口段階別にピックアップした103館と鳥取県下の図書館との詳細な比較、分析を行って興味深い。専門職員のことに関しては、ほとんど触れられていない。
 近藤延幸・前田良人『市町村立図書館の経営分析に関する考察と鳥取県の現状』鳥取県立図書館 1987
 公立図書館の指標について、館長の司書資格の有無による図書館費、図書費、貸出密度などの比較、分析をしているのは、私の見た限りでは、次の文献と拙稿（公立図書館の現状と課題—貸出しを中心に—『大手前女子大学論集』19号所収）だけである。
 森耕一 公立図書館の発展とその課題—イギリスと日本との比較—『公立図書館の歴史と現在』 P. 57-89
 - 2) 図書館員の問題調査研究委員会 司書職制度についての調査報告『図書館雑誌』82(6):24-25 (1978)
 - 3) 82年だけは、『図書館年鑑』1982年版による。
 - 4) 75年から87年まで、本館の館長が司書有資格者であった市は、三沢、気仙沼、米沢、原町、熊谷、稲城、清瀬、国立、東村山、日野、町田、鎌倉、平塚、富山、浜松、津島、寝屋川、枚方、尼崎、観音寺の20市。地域館は、大田区（3）、大阪（6）、神戸（2）の3市区、11館。
 - 5) 本館が75年～83年の新設で、そのときから87年まで館長が司書有資格者であった市は、砂川、秋田、二本松、取手、水海道、小山、大田原、真岡、八潮、狛江、保谷、岩倉、草津、長浜、八幡、松原、八尾、総社、玉名の19市。地域館は、札幌（1）、小平（1）、多摩（2）、鎌倉（1）、川崎（1）、横浜（4）、浜松（1）、吹田（1）、豊中（1）、枚方（2）、大阪（8）、尼崎（1）、神戸（1）、広島（1）の14市26館と、大田（5）、墨田（1）、世田谷（1）、葛飾（1）、品川（2）の5区10館。
 - 6) 83年以前から87年まで、本館の館長が司書有資格者であった市は、宮古、大館、能代、鶴岡、酒田、長井、郡山、相馬、石岡、佐野、伊勢崎、安中、大宮、富士見、市川、浦安、佐原、柏、銚子、東金、小平、小田原、藤沢、新発田、白根、松任、福井、武生、飯田、上田、岡谷、茅野、熱海、静岡、東海、豊明、大府、西尾、半田、尾西、名張、守山、福知山、箕面、門真、貝塚、柏原、富田林、加古川、三木、岡山、三原、福山、徳山、大牟田、八代、名護の56市。地域館は、千葉（1）、日野（1）、三鷹（1）、川崎（2）、横浜（2）、名古屋（4）、大阪（2）、豊中（1）、松原（1）、神戸（3）、高知（1）の11市19館と、大田（2）、江東（1）、品川（1）、杉並（1）、墨田（1）の5区6館。
 - 7) 森耕一『公立図書館の歴史と現在』日本図書館協会 1986 P. 84-85
 - 8) 人口10万～20万のところで、P館は日野、富田林、東村山、松原、徳山、八代、大牟田、伊勢崎、小山、上田、熊谷、門真、鶴岡、小田原の14市、NP館の市名は省略。
 両グループの数値は、次のとおりである。
- | | 市数 | 人口 | 図書館費 | 人口一人あたり |
|-----|----|---------|-------------|---------|
| P館 | 14 | 1,825千人 | 2,023,497千円 | 1,108円 |
| NP館 | 26 | 3,176千人 | 2,181,005千円 | 687円 |
- 9) 糸賀雅児 公共図書館の活動指標と図書館内の要因の分析『図書館学会年報』28(1):22-23 (1978)
 - 10) 森 前掲書 P. 266-67
 - 11) 森耕一 『図書館サービスの測定と評価』日本図書館協会 1985 P. 239
 なお、森氏の指摘は、望ましい基準(案)の元となった『市民の図書館』の基準に対してであ

図書館経営の比較

る。購入図書回転率の16回転については、『図書館雑誌』82(6):358(1988)で、「その後の実績からみると、この指標は20~40(少ししぼると24~36)が妥当である」と述べている。

- 12) 糸賀 前掲論文 p. 19
- 13) 森 『図書館サービスの測定と評価』 p. 241
- 14) 日本図書館協会『市民の図書館』増補版 同協会 1976 p. 118
- 15) 石塚栄二 図書館財政論覚え書き 『図書館界』 22(6):226-27(1972)
- 16) 糸賀 前掲論文 p. 14
- 17) 同上 p. 14
- 18) 同上 p. 23
- 19) 石塚栄二 前掲論文 p. 226
- 20) 森 『図書館サービスの測定と評価』 p. 276

別表1 Pグループ・図書館の指標(その1)

市名	人口 千人	図書館 (BM)	職員数 人	司書数 人	蔵書数 千冊	受入冊数 冊	購入冊数 冊	登録者数 人	貸出冊数 千冊	図書館費 千円	資料費 千円	図書費 千円	蔵書 冊	人口
浦安	94	4(1)	27	20	348	45,232	44,923	59,019	926	304,285	109,438	100,550	3.7	
八幡	72	1(1)	14	12	114	12,161	11,423	16,667	493	122,456	17,550	15,098	1.6	
草津	87	1(1)	9	6	106	15,093	14,679	20,602	577	101,578	24,092	21,632	1.2	
国立	64	1	15	11	182	13,416	12,208	20,715	378	139,870	21,688	17,321	2.8	
清瀬	64	4	19	10	191	12,347	11,234	21,325	310	132,627	20,149	16,382	3	
取手	78	1(1)	9	9	189	14,395	13,26	39,86	376	108,193	22,101	20,047	2.4	
東海	95	1(1)	13	7	126	18,387	17,329	19,306	425	131,922	22,629	20,554	1.3	
半田	93	1	8	6	126	15,381	11,23	5,783	411	90,324	20,196	16,753	1.4	
粕江	72	1	12	4	182	17,51	15,483	21,623	267	65,958	13,006	11,600	2.5	
柏原	71	1(1)	9	7	123	9,734	9,222	12,126	255	66,071	10,834	9,703	1.7	
飯田	92	2	10	9	291	17,563	16,248	17,863	310	78,949	21,145	19,984	3.2	
大府	66	1(1)	6	5	86	5,579	5,243	25,389	159	87,207	10,355	8,600	1.3	
西尾	92	1	11	6	90	8,927	7,306	20,951	219	95,694	16,350	15,000	1	
富士	86	1(1)	9	5	61	18,923	18,923	9,359	201	71,131	21,115	20,000	0.7	
佐野	82	1(1)	9	7	134	9,766	9,136	2,943	189	91,757	16,633	12,003	1.6	
三木	74	1	5	4	78	8,618	6,932	18,924	163	48,122	8,039	7,500	1.1	
三原	86	1(1)	7	3	121	6,449	5,884	12,691	182	67,257	8,961	7,996	1.4	
新発	78	1	11	5	90	5,208	4,479	6,663	153	69,472	7,943	6,404	1.2	
岡谷	61	1	7	3	105	8,621	8,37	6,512	97	60,357	13,075	9,579	1.7	
宮古	61	1(1)	5	4	59	3,788	3,144	5,65	93	50,363	7,245	5,818	1	
米沢	93	1(1)	8	5	145	6,774	6,418	4,272	139	54,905	8,371	7,602	1.6	
八潮	66	1	5	5	78	3,132	3,132	18,778	94	46,921	7,270	6,390	1.2	
貝塚	78	1(1)	5	2	59	5,292	5,002	6,054	109	42,281	6,291	6,231	0.8	
気沼	68	1(1)	9	5	118	7,512	6,128	6,293	93	49,220	7,116	6,500	1.7	
福知山	65	2(1)	4	2	61	2,618	2,294	4,606	89	20,908	4,362	3,062	0.9	
武生	68	1	7	4	124	4,743	3,293	6,621	87	46,310	8,364	6,703	1.8	
合計	2,006	38(17)	253	166	3,387	297,169	272,923	410,595	6,795	2,244,138	454,318	399,012	1.9	
平均値													0.8	
標準偏差														

図書館経営の比較

別表1 Pグループ・図書館の指標(その2)

市名	貸出/人口 冊	館費/人口 円	受入/人口 冊	購入/人口 冊	登録率 %	貸出/登録 冊	貸出/蔵書 回	貸出/購入 回	司書率 %	人口/職員 人	貸出/職員 冊	資料費/人口 円	コスト 円
浦安	9.85	3,237	481	478	62.8	15.7	2.7	20.6	74.1	3,481	34,296	1,164	329
八幡	6.85	1,701	169	159	23.1	29.6	4.3	43.2	85.7	5,143	35,214	244	248
草津	6.63	1,168	173	169	23.7	28	5.4	39.3	66.7	9,667	64,111	277	176
国立	5.91	2,185	210	191	32.4	18.2	2.1	31	73.3	4,267	25,200	339	370
清瀬	4.84	2,072	193	176	33.3	14.5	1.6	27.6	52.6	3,368	16,316	315	428
取手	4.82	1,387	185	170	51.1	9.4	2	28.4	100	8,667	41,778	283	288
東海	4.47	1,389	194	182	20.3	22	3.4	24.5	53.8	7,308	32,692	238	310
半田	4.42	971	165	121	6.2	71	3.3	36.6	75	11,625	51,375	217	220
狛江	3.71	916	243	215	30	12.3	1.5	17.2	33.3	6,000	22,250	181	247
柏原	3.59	931	137	130	17.1	21	2.1	27.7	77.8	7,889	28,333	153	259
飯田	3.37	858	191	177	19.4	17.4	1.1	19.1	90.9	8,364	28,182	230	255
大府	2.41	1,321	85	79	38.5	6.3	1.8	30.3	83.3	11,000	26,500	157	548
西尾	2.38	1,040	97	79	22.8	10.5	2.4	30	54.5	8,364	19,907	178	437
富士見	2.34	827	220	220	10.9	21.5	3.3	10.6	55.6	9,555	22,333	246	354
佐野	2.3	1,119	119	111	3.6	64.2	1.4	20.7	77.8	9,111	21,000	203	485
三木	2.2	650	116	94	25.6	8.6	2.1	23.5	80	14,800	32,600	109	295
三原	2.12	782	76	68	14.8	14.3	1.5	30.9	42.9	12,286	26,000	104	370
新発田	1.96	891	67	57	8.5	23	1.7	34.2	45.5	7,091	13,909	102	454
岡谷	1.59	989	141	137	10.7	14.9	0.9	11.6	42.9	8,714	13,857	214	622
宮古	1.52	826	62	52	9.3	16.5	1.6	29.6	72.7	11,091	16,909	119	542
米沢	1.49	590	73	69	4.6	32.5	1	21.7	62.5	11,625	17,375	90	395
八潮	1.42	711	47	47	28.5	5	1.2	30	100	13,200	18,800	110	499
貝塚	1.4	542	68	64	7.8	18	1.8	21.8	40	15,600	21,800	81	388
気仙沼	1.37	724	110	90	9.3	14.8	0.8	15.2	55.6	7,550	10,333	105	529
福知山	1.37	322	40	35	7.1	19.3	1.5	38.8	40	13,000	17,800	67	235
武生	1.28	681	70	48	9.7	13.1	0.7	26.4	57.1	9,714	12,429	123	532
合計	3.29	1,109	144	131	20.4	20.8	2	26.6	65.1	9,172	25,819	217	378
平均値	2.12	606	89	89	14.4	15	1.1	8.1	18.6	3,184	12,086	204	120

図書館経営の比較

別表2 NPグループ・図書館の指標(その1)

市	No.	人口 千人	図書館 (BM)	職員数 人	司書数 人	蔵書数 千冊	受人冊数 冊	購入冊数 冊	登録者数 人	貸出冊数 千冊	図書館費 千円	資料費 千円	図書費 千円	蔵書/人口 冊
1		94	4	23	16	310	29.827	27.058	44.202	525	261,612	60,726	37,161	3.3
2		67	1	6	5	98	2.995	2.99	12.259	292	64,293	7,914	3,077	1.5
3		72	1	8	2	100	13.606	12.042	9.821	301	62,986	21,759	20,000	1.4
4		75	1(1)	8	3	113	8.991	7.271	20.866	303	62,586	12,244	10,228	1.5
5		87	1(1)	13	7	124	12.18	11.073	38.374	313	121,079	25,460	19,649	1.4
6		86	1	8	3	177	12.635	9.635	12.198	306	74,202	14,804	12,368	2.1
7		61	6	12	6	158	22.712	21.866	4.868	204	101,748	26,511	25,052	2.6
8		61	1	6	1	93	5.505	2.086	10.583	168	51,500	9,520	7,500	1.5
9		81	1(1)	6	3	121	9.05	7.696	11.736	218	56,168	12,089	10,686	1.5
10		94	1(1)	7	4	96	6.245	5.721	5.13	221	55,107	11,205	10,000	1
11		70	1(1)	10	5	110	13.6	10.346	9.259	164	93,347	17,456	15,109	1.6
12		70	1(1)	5	3	56	6.835	6.387	15.049	161	59,381	10,431	9,695	0.8
13		74	1	4	2	89	20.825	18.079	16.044	168	47,472	23,881	23,045	1.2
14		69	1(1)	5	2	58	7.806	5.86	4.238	147	45,370	8,399	7,999	0.8
15		89	1	6	4	133	8.247	7.971	10.56	185	37,852	13,984	12,625	1.5
16		78	1(1)	7	2	85	3.134	2.429	15.178	159	42,312	6,007	3,000	1.1
17		84	1(1)	10	5	107	6.205	5.08	8.412	164	57,596	6,825	6,034	1.3
18		78	1	5	4	85	10.445	9.389	6.184	143	42,721	17,431	14,932	1.1
19		70	1(1)	6	2	115	6.047	5.695	5.734	127	57,903	11,196	9,362	1.6
20		85	1(1)	4	2	55	4.579	3.816	17.705	143	48,511	6,627	6,023	0.7
21		93	1(1)	7	2	73	11.746	11.63	9.57	156	52,251	12,772	12,372	0.8
22		80	1	6	1	79	8.302	7.946	9.007	126	54,167	12,107	11,590	1
23		92	1	5	2	68	9.518	4.188	5.288	136	45,496	7,541	6,499	0.7
24		98	5	2	1	89	5.848	4.819	6.251	142	18,917	7,031	6,597	0.9
25		66	1(1)	5	4	34	2.416	1.736	6.344	95	18,612	3,275	2,759	0.5
26		93	1	3	1	47	4.873	4.412	4.316	104	16,827	6,178	5,054	0.5
27		100	1(1)	7	2	82	7.22	4.782	7.291	107	55,233	8,357	7,000	0.8
28		64	1	6	4	83	3.875	3.656	3.322	66	18,158	5,126	4,620	1.3
29		64	1	3	1	63	2.111	1.856	2.689	63	26,103	4,134	3,844	1
30		61	1(1)	2	1	55	7.82	2.72	4.731	61	22,293	3,995	2,850	0.9
31		64	1(1)	6	3	35	1.877	1.864	2.59	63	28,019	2,654	2,211	0.6
32		68	1	7	2	71	4.656	4.302	3.525	64	44,747	9,790	7,500	1
33		65	1	3	1	61	2.429	2.181	4.282	61	36,039	3,716	3,239	0.9
34		92	1(1)	5	2	68	3.348	2.79	3.578	73	36,197	4,494	4,020	0.7
35		61	1(1)	4	1	55	5.455	2.801	2.552	44	39,628	6,361	5,200	0.9
36		72	1	6	3	68	3.539	3.146	3.51	51	38,846	5,268	4,506	0.9
37		66	1(1)	5	0	65	1.676	1.449	3.924	42	42,138	2,552	2,000	1
38		95	1	5	2	62	9.151	6.508	4.27	54	33,365	21,085	20,840	0.7
39		63	1	3	1	42	1.926	1.229	2.031	24	13,764	2,158	1,958	0.7
40		64	1	5	3	46	4.866	4.735	2.216	24	35,451	8,850	7,500	0.7
合計		3,066	52(19)	254	118	3,529	314.121	261.24	369.687	5,968	2,119,997	461,913	385,704	1.2
平均値														0.6
標準偏差														

図書館経営の比較

別表2 NPグループ・図書館の指標(その2)

市 No.	貸出/人口 冊	館費/人口 円	受入/人口 冊	購入/人口 冊	登録率 %	貸出/登録 冊	貸出/蔵書 回	貸出/購入 回	司書率 %	人口/職員 人	貸出/職員 冊	資料費/人口 円	コスト 円
1	5.59	2,783	317	288	47	11.9	1.7	19.4	67.3	3,837	21,429	646	498
2	4.36	960	45	45	18.3	23.8	3	97.7	83.3	11,667	48,667	118	220
3	4.18	875	189	167	13.6	30.6	3	25	25	9,000	37,625	302	209
4	4.04	834	120	97	27.8	14.5	2.7	41.7	37.5	9,375	37,875	163	207
5	3.6	1,392	140	127	44.1	8.2	2.5	25.7	53.8	6,692	24,077	293	387
6	3.56	863	147	112	14.2	25.1	1.7	31.8	37.5	10,750	38,250	172	242
7	3.34	1,668	372	358	8	41.9	1.3	9.3	50	5,083	17,000	435	499
8	2.75	844	104	90	17.3	15.9	1.8	30.5	16.7	10,167	28,000	156	307
9	2.69	693	112	95	14.5	18.6	1.8	28.3	57.1	11,571	31,142	149	258
10	2.35	586	66	61	5.5	43	2.3	38.6	57.1	13,429	31,571	119	249
11	2.34	1,334	194	148	13.2	17.7	1.5	15.9	50	7,000	16,400	249	569
12	2.3	848	98	91	21.5	10.7	2.9	25.2	60	14,000	32,200	149	369
13	2.27	642	281	244	21.7	10.5	1.9	9.3	50	18,500	42,000	323	283
14	2.13	658	113	85	6.1	34.7	2.5	25.1	36.4	12,545	26,727	122	309
15	2.08	425	93	90	11.9	17.5	1.4	23.2	66.7	14,833	30,833	157	205
16	2.04	542	40	31	19.5	10.5	1.9	65.5	28.6	11,143	22,714	77	266
17	1.95	686	74	60	10	19.5	1.5	32.3	50	8,400	16,400	81	351
18	1.83	548	134	120	7.9	23.1	1.7	15.2	72.7	14,182	26,000	223	299
19	1.81	827	86	81	8.2	22.1	1.1	22.3	33.3	11,667	21,167	160	456
20	1.68	571	54	45	20.8	8.1	2.6	37.5	44.4	18,889	31,778	78	339
21	1.68	562	126	125	10.3	16.3	2.1	13.4	28.6	13,286	22,286	137	335
22	1.58	677	104	99	11.3	14	1.6	15.9	16.7	13,333	21,000	151	430
23	1.48	495	103	46	5.7	25.7	2	32.5	40	18,400	27,200	82	335
24	1.45	193	60	49	6.4	22.7	1.6	29.5	15.4	15,077	21,846	72	133
25	1.44	282	37	26	9.6	15	2.8	54.7	72.7	12,000	17,273	50	196
26	1.12	181	52	47	4.6	24.1	2.2	23.6	25	23,250	26,000	66	162
27	1.07	552	72	48	7.3	14.7	1.3	22.4	28.6	14,286	15,286	84	516
28	1.03	284	61	57	5.2	19.9	0.8	18.1	66.7	10,667	11,000	80	275
29	1	408	33	29	4.2	23.4	1	33.9	33.3	21,333	21,000	65	414
30	1	365	128	45	7.8	12.9	1.1	22.4	33.3	20,333	20,333	65	365
31	0.98	438	29	29	4	24.3	1.8	33.8	50	10,667	10,500	41	445
32	0.94	658	68	63	5.2	18.2	0.9	14.9	28.6	9,714	9,143	144	699
33	0.9	554	37	34	6.6	14.2	1	28	28.6	18,571	17,429	57	591
34	0.8	393	36	30	3.9	20.4	1.1	26.2	40	18,400	14,600	49	496
35	0.72	650	89	46	4.2	17.2	0.8	15.7	25	15,250	11,000	104	900
36	0.71	540	49	44	4.9	14.5	0.8	16.2	50	12,000	8,500	73	762
37	0.64	638	25	22	5.9	10.7	0.6	29	0	13,200	8,400	39	1,003
38	0.57	351	96	69	4.5	12.6	0.9	8.3	40	19,000	10,800	222	618
39	0.38	218	31	20	3.2	11.8	0.6	19.5	33.3	21,000	8,000	34	574
40	0.38	554	76	74	3.5	10.8	0.5	5.1	60	12,800	4,800	138	1,477
合計													
平均値	1.92	689	102	86	11.7	18.8	1.7	27.1	42.3	13,382	22,206	148	431
標準偏差	1.21	454	76	71	9.8	8.1	0.7	16.3	18.0	4,508	10,254	118	256

図書館経営の比較